

合宿の公開個別フォローで、弟の話をした。以前友達に「弟のことあんまり話さないよね」と言われて、その時始めて積極的に話をしたくないと思っている自分がいることに気が付いた。別に隠してる訳じゃない。ただ、「あえて」話そうと思わない。

合宿で公開個別フォローをやろうと決めていたものの、お題に悩んで陽子さんに相談した時、その「あえて」に向き合うことをテーマにしようと思った。

同じ遺伝子を持って、同じ家庭で育ったのに、私と弟は、考え方も生き方も全く違う。弟は、幼少期はやんちゃで済んだけど、小学校高学年以降は親が学校に何度も呼び出され、ぎりぎりを受かった高校は中退。正社員として働かず、特段趣味がある訳でも、友達が多くいる訳でもない。(ここがマイルドヤンキーとは違う)正直何が楽しくて生きてるんだろうと思っていた。

「頑張ることが正義」だという価値観が私にはあるから、弟の人生を肯定できなかった。働いてる方がえらいんだと自分の価値感を振りかざして、一緒に住んでいた頃は弟に窮屈な思いをさせていたかもしれないと、今振り返って思う。

7～8年前に弟が難病であることが発覚した。それまでもよく熱を出したり、調子を崩すことが多かったけど、私と母は弟の不規則な生活に原因があると思って、さほど心配していなかった。「また風邪引いたの!？」位の扱いだっただけ。きっと病名がつく前にも症状が出ていたのだろうけど、弟の声に耳を貸していなかった。

弟が難病であることを公言したところで、相手も反応に困るだろうし、同情されたい訳じゃない。だから、私自身「言わない」という選択をしてきた。それは、可哀そうだと思われたくない私のプライドから来るものなのだと思っていたけど、合宿で陽子さんから、「弟のことを可哀そうだと思ってるんだ」と言われて、涙が止まらなかった。

ああ、そうか。私は弟のことを可哀そうだと思ってるけど、相手にもそう思われてしまったら、それを認めざるを得ない。弟の可哀そうな現実を、自分が1番認めたくないと思っていたのかもしれない。

そして、「可哀そう」には、弟に対する罪悪感も含まれている。病気が原因だったかもしれないのに、弟の能力、性格の問題だと思い込んでいたこと、その辛さをわかってあげられなかったこと、確率としては自分になってもおかしくないのに、病気になったのは弟だったこと。

ずっと蓋をして、「あえて」話さないという選択をしてきたけど、「あえて」の蓋を開けてみたら、色んなものが隠れていた。

自分で「向き合っていない」と自覚できていれば話は早いけど、大抵のものは自分で向き合えてないことに気付いていない。だから、難しい。

男兄弟との関係なんてこんなものだろうとどこかで思っている自分がいたので、今回合宿をきっかけに向き合えて良かったと思うし、自分1人の力では向き合えなかったと思う。

10年プロジェクトは、人の力を借りながら、自分に向き合う場なんだと、改めて思った。

(E.M 40代女性 埼玉県)